

「めいがくのすきま展」報告

10月5日～12月18日までの約2ヶ月半の期間「めいがくのすきま展」と銘打ち、こまどり社・作品展をおこないました。

「空間や状況における隙間を活用しての暮らしの提案・実践」を旨として活動するこまどり社であります。以前の倍の場所面積となったボランティアセンターにできた隙間空間を如何に使うかを考えると、私が過去にこまどり社の仕事で描き貯めたイラストを展示するのでもよかったのですが、ボランティアセンターという場所は、アートの展示を専門とするギャラリー空間でなく、日常的に人が出入りし、様々なボランティア活動の拠点。せっかくだからその空間の日常に融和した配置を考えられる作品づくりの目論みを漠然と抱きまして。展示期間中に空間を理解しながら徐々にピントを合わせる過程を見せながらの、いわば「アドリブ」的展開でやっていこうかと思いついたわけであります。

展示でおこなったことは普段持ち歩いてる布地を使った椅子の梱包、「顔のないだるま」の配置、家及び白金までの道中で調達したゴミを使っての即興での作品製作（「めいわく」と題したパフォーマンス）、こまどり社が活動のルーツとする映像の紹介などなど。

最終日には丸一日をつかって「最終日パフォーマンス」を目論み、自身を作品（「顔のないだるま」）の台座に見立てる（作品の一部になった気分を味わう）パフォーマンスと、ボラセン空間内で似顔絵を100枚描こうとする（結局この日は4時間かけて53枚で時間切れ・・・）パフォーマンスを敢行しました。

私自身、芸術家と自称しておきながら、世間一般的な「芸術家」認識に見合った創作技術、構成力、そして活動資金を持ちあわせていない自覚があります（無論その認識の基準というものも無い筈なのでありますが…）。

とはいえアートとは特別なものを持つてる者だけがやる行為ではない。生活者の感覚の投影、それ自体がアートとなりうる可能性。私はその辺りを軸にして「こまどり社」の活動をしているつもりです。ボランティア活動も諸分野のいわゆる「専門家」でもない人間がいかに活動するのか。その点でアートとボランティアは合い通じるところがあるのではと思ったりもします。それが無償のコミュニケーションであるという点でも然り（大雑把な認識ですが…）。

どちらにも必要と思えるのはテキスト（形式）よりもアドリブ（即興）、いわば想像力。たとえ実践して失敗と思えた部分も決して無駄でない。そこらへんを自身の実践を通じてつたえられたらいいなと思いながら今回の「すきま展」を試みました。正直自分の意図どおりに行かなかった部分が結構ありました。いわば試行錯誤の途中で終わった印象です。

でもその試行錯誤の有様も含めてボランティアセンターに足を運ぶ学生達に見てもらい、彼ら自身の活動のヒントにでもなってくれるところがあればいいなあと思いました。（こまどり社・仮屋崎健）

